



台湾における民主主義と同性婚

野林厚志
民博 学術資源研究開発センター

五〇年におよぶ日本の植民地支配から大陸中国に由来する中国国民党による統治への移り変わりは、台湾住民が少数の外来者によって支配される構造を変えなかった。一九四九年からじつに三八年におよぶ戒厳令のもと、国民党政権は多くの市民を反政府活動などの理由で投獄、処刑した。言論や出版は統制され、国会議員の選挙も凍結した。こうした政治状況のなかで、一九八〇年代の後半から人びとは民主主義を求めた営みを重ねていく。「女朋友 男朋友」は恋愛映画ではあるが、台湾の民主主義とは何かを考えさせてくれる作品である。

男女三人の恋愛と友情

二〇一二年の女子学生の「短パンを履きたい」というシユプレヒコールのプロローグに続き、一九八五年から物語は始まる。幼馴染の小美（女）と阿良（男）、その同級生の阿仁（男）は、全体主義的な管理を方針とする高校のなかで自由をスローガンにした校内誌を作るサークル仲間である。多感な年頃の三人には、方向の異なる恋愛感情が芽生えていた。小美は阿良への想いを秘めながら、自分を好きだと言ってくれる阿仁と交際を始める。阿良は一歩引いたかたちで、三人のなかに恋愛と友情が同居していく。

人の結婚

五年後、阿仁と阿良は学生運動に身を投じていた。一九九〇年、蒋介石を顕彰した国民党権の象徴的な建物である中正紀念堂周辺で、一週間にわたり学生が座り込みをおこなった通称「野百合学生運動」である。この運動は、台湾全体に民主化の意識を強く植えつけたといわれている。運動のさなか、阿良が阿仁に想いをよせてきたこと、阿仁が他の女子学生とも深い仲であることを小美は知る。阿良は自身の性的指向に自覚的になり、男性との関係をもつようになる。三人はそれぞれの道を歩んでいくかのように見える。一九九七年、社会人となった三人は共通のゲイの友人の結婚パーティーを機に再会する。阿仁は政治権力者の娘と家庭をもち子どもいるが、小美とは不倫関係にあった。小美は阿仁の子どもを身



1990年の学生運動は国立台湾歴史博物館の常設展「この土地、この民——台湾の物語」に登場する（筆者撮影、2012年）

「GF*BF」

原題：女朋友。男朋友

2012年／台湾／中国語・台湾語／105分／DVDあり

監督：楊雅喆（ヤン・ヤーチェ）

出演：桂綸鎂（グイ・ルンメイ）、張孝全（ジョセフ・チャン）、鳳小岳（リディア・ン・ヴォーン）ほか

台湾の高等学校の歴史の教科書の修正に偏向があることに対し、教員や高校生らが、修正の過程の透明性などを求めて2015年に運動をおこした。学生リーダーの1人が自死する等、台湾社会にとって大きなインパクトを与えた（筆者撮影、2015年）

ごもるが、彼が家庭を捨てられず、出産に危険が伴うこともわかり、墮胎を決意する。阿良もまた妻子ある男性と不倫関係にあった。年齢を重ねるにつれて理想と現実に変化し、それぞれの家族、パートナーとの関係のなかで恋愛と友情のかたちも変わっていった。後半は、いささか自己中心的なアラサー（フォー）世代の「トレンディー・ドラマ」感がぬぐえないが、高校から大学にかけての場面からは、台湾の人たちの民主主義への希求を読み取ることができる。

軍人がいる学校

国民党の政治支配は学校教育にもおよんだ。高校や大学には軍部から「教官」が派遣され、軍事教練をおこなうとともに、校内における政治活動の監視、学生たちの管理をおこなった。本作でも「教官」は重要な役回りである。校内誌の原稿を検閲した「教官」は、

文章中の各文の頭文字をつなげると「我不是你養的狗（わたしはあなたが飼う犬ではない）」となることを見つけ、原稿をばつにする。プロローグでは「短パンを履かせろ」と唱える女子学生たちに、現代の「教官」が大声で静かにしろとその声を封じる。若い世代は、政治弾圧を受けてきた親の世代から歴史を学ぶだけでなく、学校における「教官」

による自由の管理をとおして、今ここにある問題として民主主義を実感している。

同性婚は国民全体で考えるべき問題

本作では、男性同士の結婚式や、男性と女性、男性同士の肉体関係の双方を織り成すように描く場面をとおして、それらが異性婚や異性愛と何が違うのかと問いかけていくようにも思われる。台湾では民主化の流れにあわせるかのように同性婚を求める動きが顕在化した。賛否はともかく、同性婚や同性愛についての社会的な認知度は比較的高い。

二〇一八年一月二十四日の台湾の統一地方選挙では、地方政治の首長や議員の選出に加えて同性婚の是非を問う国民投票（台湾では「公民投票」）がおこなわれた。二〇一七年の五月に、台湾の憲法裁判所にあたる司法院大法官會議が、同性婚を可能としない現行の民法は違憲であると判断し、二年以内の法的対応を求めた。今回の国民投票はそれを受けての実施となった。結果は、民法の定める婚姻は認めず、「共同生活をしその権利を認める」ためのあらたな法整備をおこなうという消極的肯定となったが、現時点での民意を明らかにしたという点においては評価されるべきであろう。

台湾の選挙の投票率はおしなべて高い。それは、自分の一票が自分たちの運命を大きく変える一票であることを肌身に感じてきたからである。そして、同性婚の是非を国民投票ではかろうとした台湾では、それが国民一人一人の意思を確認するべき民主主義の問題であると認識されているのだろう。